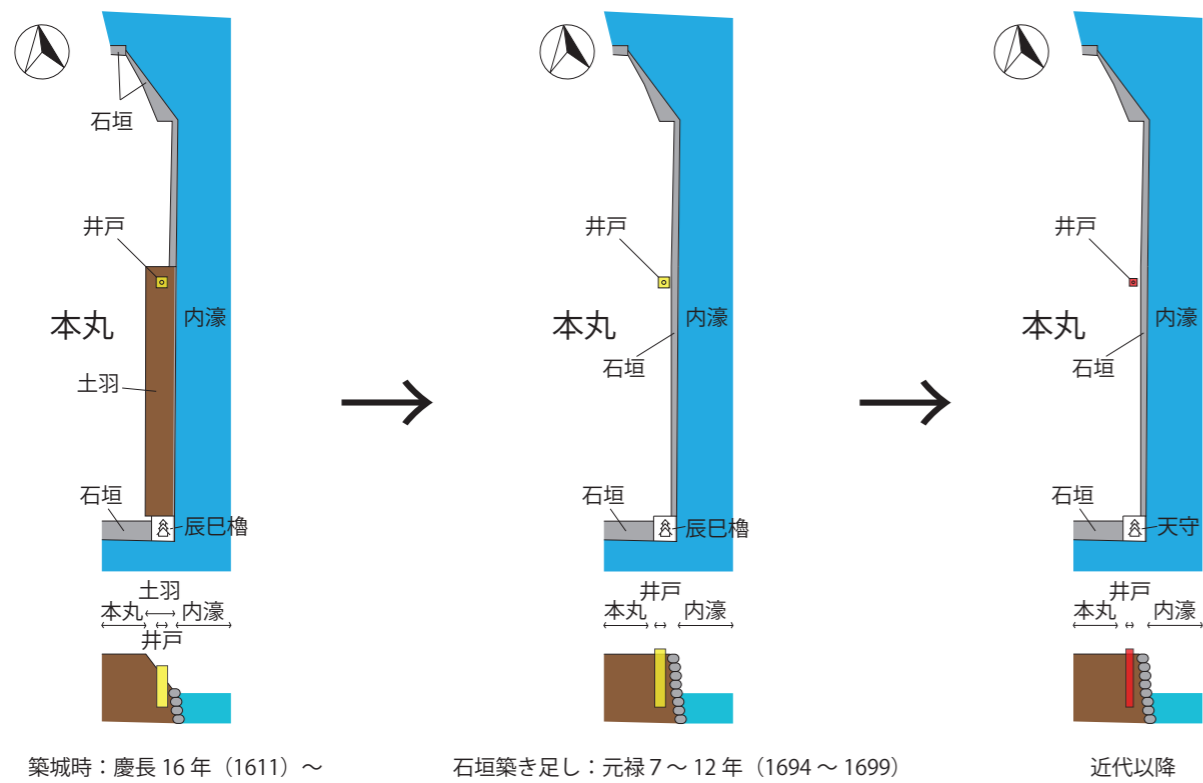
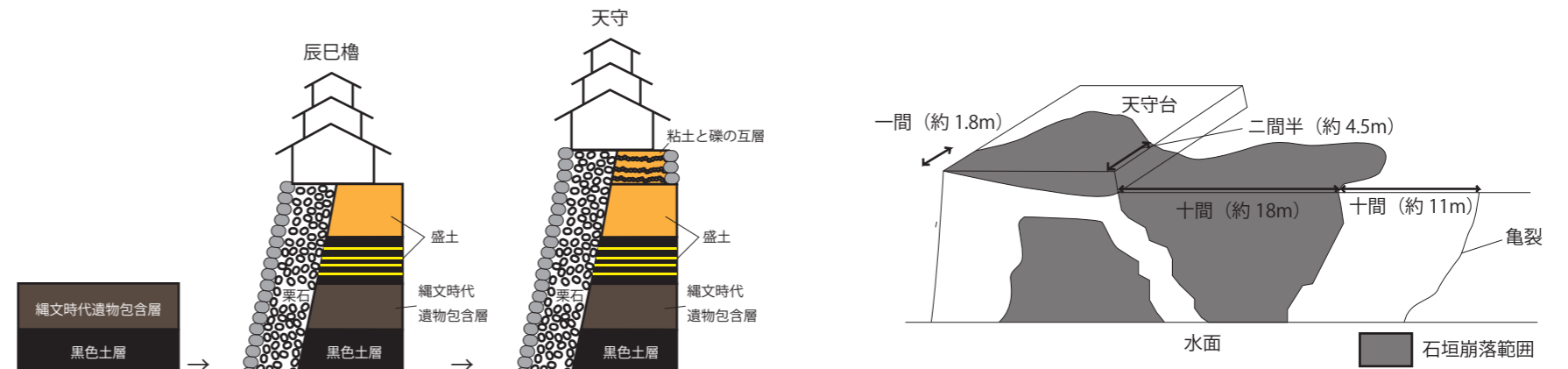


平成 29 年度弘前城本丸石垣発掘調査現地説明会資料

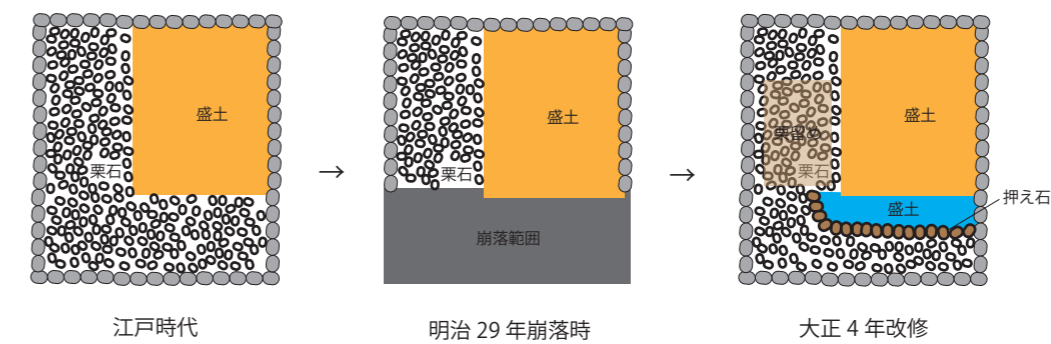


石垣・井戸変遷図



明治 29 年石垣崩落範囲模式図

天守台石垣構築変遷図



天守台石垣構造変遷図



写真 1 天守台解体状況(東から)

(新) C > B > A (古)

- B 礫・粘土互層盛土
- 表面を粘土で固めた裏込め石
- A 黄褐色盛土
- C 白色盛土
- 普通の裏込め石

今年度から本格的に始まった石垣解体工事も半年が経過し、現在の工事進捗状況は総解体個数約 3,000 石中 924 石 (工事進捗率約 35%) です。天守台部分は、東側は天端から 8 石目まで、西側は天端から 2 石目まで、本丸東側平場部分は天端から 6 石目まで解体しています。解体に伴う発掘調査では、様々な成果が確認されています。天守台では、近代の修理痕である盛土と裏込め石の範囲が確認されており、天守台よりも北側に広がる白色粘土の範囲を併せると、絵図に残る明治 29 年の崩落範囲と概ね重複します。

盛土だけでなく、石垣構造からも新旧の違いが確認されています。古い石垣は、控えの長い石・大きい矢穴・胴部に割石のみの裏込め石が見られ、新しい石垣は、控えが短い石・小さい矢穴・玉石のみの裏込め石が見られます。

東面北寄りの石垣背面からは、排水遺構と井戸遺構が確認されています。排水遺構の構造は石組みで暗渠を作り、石垣背面や隣接の井戸からの排水を、蛇口から内堀へ流す構造です。上面は暗渠で新しい井戸と繋がっていました。水漏れ防止のために白色粘土で固められていましたが、経年劣化による水漏れのせいか空洞化が見られます。構築時期は、上部は近代の手が入っていますが、下部は元禄年間のもので推定しています。

井戸遺構は新旧 2 時期の井戸が重複して確認されています。古い井戸は元禄と推定される石垣の背面に作られ、井戸の東壁面の石組みで裏込め石の崩落を防いでいます。井戸枠は東壁面の石組み、他 3 面は板材を組んだものと考えられ、詳細は不明ですが元禄年間の石垣築き足の際に同時施工されたものと推測されます。井戸埋戻しの土は、粘性土と砂質土の互層で丁寧に埋め戻されています。新しい井戸は、古い井戸を埋め戻した跡の中央に作られ、現在天守の北側に展示してある石製の井戸枠が置かれていました。埋め土から板材が出土しており、出土した遺物から近代以降と考えられます。

以上、これらの調査成果を踏まえ、弘前城の文化財としての価値、独特な伝統技術を生かしながら、石垣の孕みの原因を追究し、崩れない石垣の復元を今後も目指していきます。



写真2 全体写真

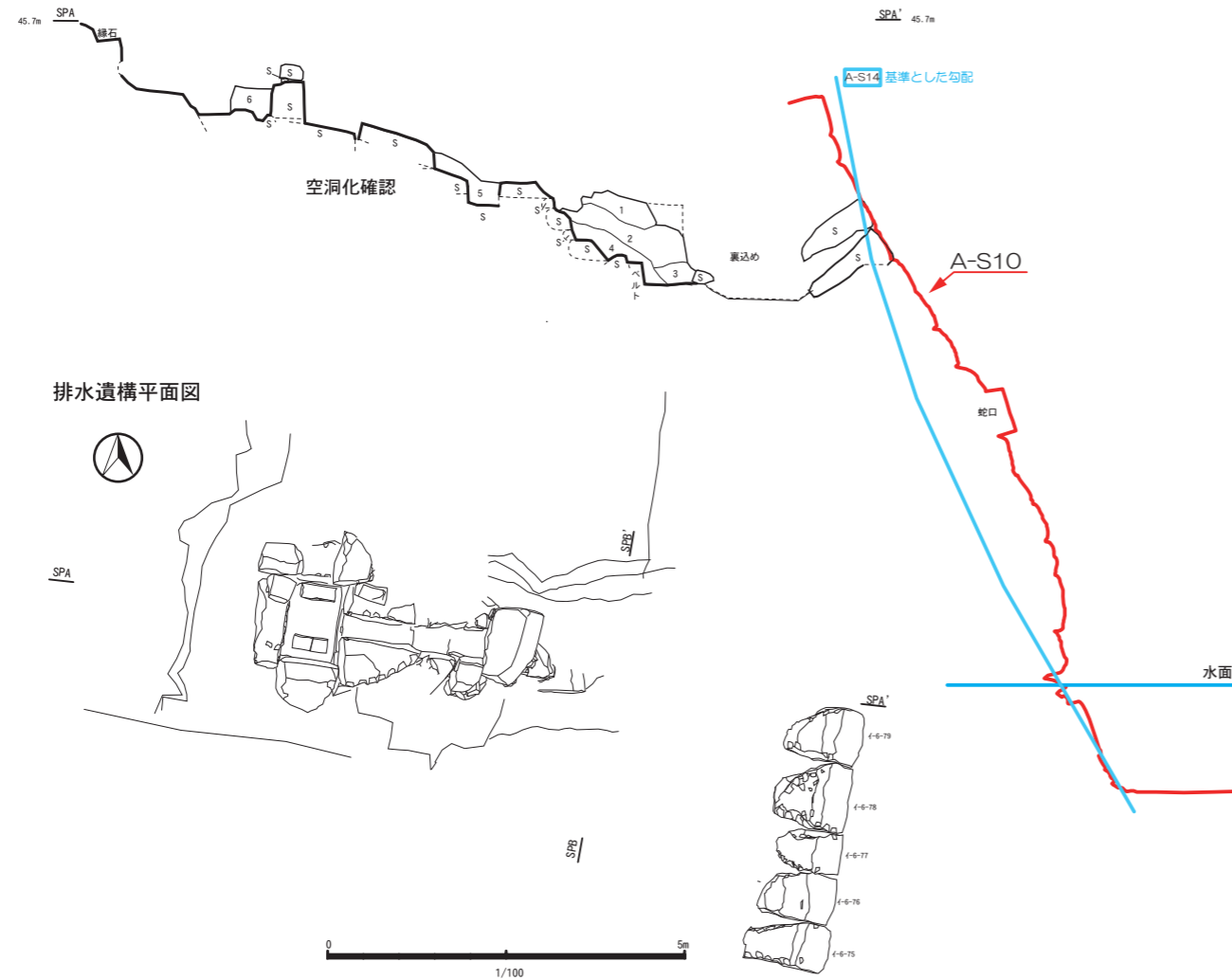


写真3 井戸遺構掘削状況(北西から)

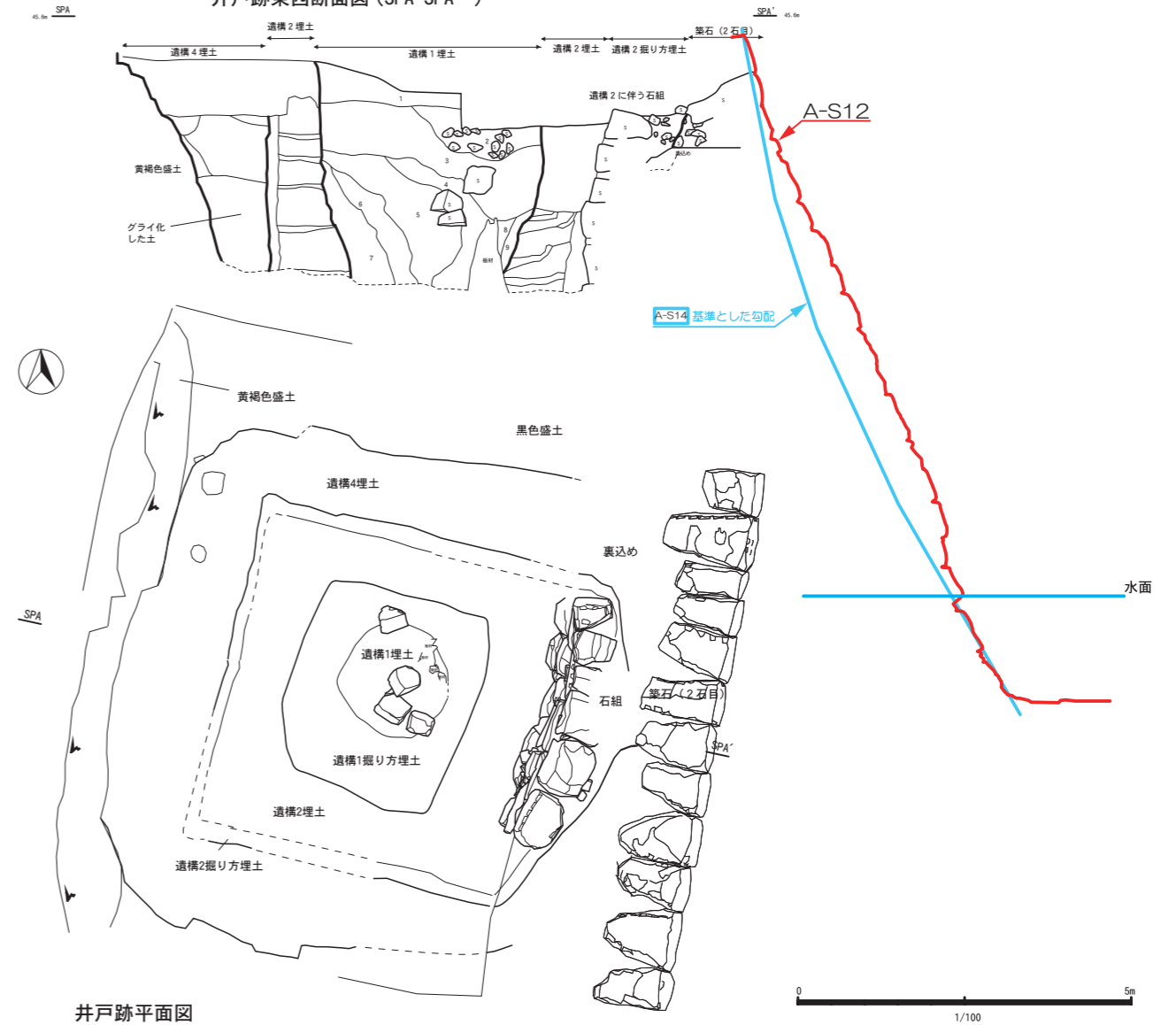
井戸跡平断面図(1/100)

排水遺構平断面図(1/100)

排水遺構東西断面図(SPA-SPA')



井戸跡東西断面図(SPA-SPA')



井戸跡平面図